

「青年海外協力隊OB」

# 南 淳志さん

MINAMI Atsushi

## 協力隊参加のきっかけは 大学院の先輩との出会い

「実は国際協力に関心を持ったのは、20歳を過ぎてからなんです」

太平洋に浮かぶ島国ソロモン諸島で2010年から2年間、青年海外協力隊員として活動した南淳志さん。大学院ではバクテリアを使って水を浄化する技術を研究していた。卒業後は研究者の道へ進み、水や土壌処理の研究に携わっていたが、ある時、大学院時代の先輩が青年海外協力隊として活動中だと知る。「協力隊のことさえ知らなかった」という南さんだが、先輩を訪ねてカンボジアに行くことに。そこで目にしたのは、

# 「安全な水を人々に届けられるよう、 水質検査を行えるようになってほしい」

人々に安全な水を届けるために必要不可欠な水質検査。しかし、開発途上国では検査体制や分析機器の整備が十分ではない。青年海外協力隊OBの南淳志さんは、ソロモン諸島で水事業にかかわる組織の連携に取り組んだ。

## JICA Volunteer Story

PROFILE

1983年京都府出身。2008年に大学院を卒業後、大阪産業大学新産業研究開発センターで水・土壌処理方法の研究開発を担当。2010年1月から2年間、青年海外協力隊(水質検査)としてソロモン諸島で活動。



国立公衆衛生試験所の同僚たちと南さん(後列右端)



現地の人々と共に汗を流し、水質検査や分析の技術を伝える先輩の姿だった。自分も開発途上国の人々の役に立てるかもしれない。南さんは、研究者としての経験を生かせる「水質検査」の職種に挑戦。飲料水の供給に課題を抱えるソロモン諸島に赴任することになった。

配属先は、首都ホニアラにある保健省管轄の国立公衆衛生試験所。環境汚染物質の分析や食品の衛生管理、感染症対策など、公衆衛生に関するモニタリングを行う機関だが、08年に設立されたばかりでうまく機能していなかった。主な業務の一つはホニアラに供給される水道水の分析だったが、実際には定期的な水質検査が行われていなかったのだ。「安全な飲料水にするためには、世界保健機関(WHO)が定めた国際基準をクリアしなければなりません。試験所にはそれを分析するための機器や試薬などの資機材が不十分でしたし、化学的な分析を行う予算も人材も足りていなかった」と南さんは振り返る。

## 組織間の連携で 水質検査がスムーズに

課題が山積する中、保健省と交渉して必要な機器を発注したりと、状況を改善しようと努力した南さんだったが、事はなかなかうまく進まない。

そこで南さんは考えた。予算、人手、機器などが不足している試験所だけではなく、水分野を担当する複数の組織と連携すれば、より効率的に水質検査を行えるはず。「日本で産官学の連携に取り組む研究所で働いた経験があり、違う組織が一つの事業を協働で実施するのは自然なことでした」と南さん。そこで、水質検査を行う保健省、水道供給者である水道公社、そして採水を行うホニアラ市役所の3者を中心として「水質監視委員会」を設立することを提案。各組織か



a. 数カ月に1回、水質監視委員会のメンバーが集まり活動内容を報告。南さんも分析結果を発表した  
b. 採水した水にどんな成分が含まれているか、専用の機器を使って分析する  
c. 委員会の設立に向け、保健省の同僚と水道公社を訪問。水道公社にシニア海外ボランティアが派遣されていたことも連携につながった  
d. 第二の都市ギゾにも委員会の活動を普及させようと、水道事業関係者を連れ水源を視察

ら一人ずつ職員が集まり、3人一組となってホニアラの水源である貯水池やタンクなどの採水ポイントを毎週巡回する水質検査が実施されるように促した。「横のつながりが生まれて仕事がしやすくなり、各組織の職員のモチベーションも高くなりました。以前は、採水のために使う車や交通費を出せないと渋っていた各組織も、3組織のローテーションになったため負担が軽くなり、対応できるようになったのです」と南さんは話す。

実はこの「水質監視委員会」の設立は、当初から予定していたわけではなかった。南さんが試験所の現状を踏まえ、自分にできる効果的な活動は何かを考え、同僚と奔走した結果だ。「縦割行政の傾向が強く、共に水分野を担当しながら保健省と水道公社は連携できていなかった。同僚は「日本人のアツシだからこそ、複数の組織をつなげてくれた。大きな成果だよ」と言ってくれました」と南さんは話す。彼が2年間の活動で身に付けたのは、新しい環境での「適応力」。帰国後、この経験を生かすべく建設コンサルタント企業に就職し、今後も水分野の国際協力に携わっていききたいと意欲を燃やしている。

### 青年海外協力隊帰国報告会開催



6月12日、首相官邸で「内閣総理大臣主催 青年海外協力隊帰国隊員による報告会」が開催され、2010年6月以降に帰国した隊員100人が招かれた。野村明香さん(ベネズエラ/PCインストラクター)と米田勇太さん(ラオス/理数科教師)が代表して各々の活動を報告。野田佳彦内閣総理大臣や玄葉光一郎外務大臣のほか、国会議員十数人が出席し、「グローバル人材の模範的な存在として活躍してほしい」などとねぎらいの言葉をかけた。